

唐剣山遺跡発掘調査報告

～伊勢市二見町莊～



2016（平成28）年3月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

- 1 本書は、三重県伊勢市二見町莊に所在する唐削山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 この調査は、平成 26 年度宇治山田港（海岸）海岸浸食対策（工事用道路）工事に伴い、記録保存を実施したものである。
- 3 発掘調査および報告書作成は、次の体制で平成 26・27 年度に行った。
調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター
〔平成 26 年度調査〕 調査研究 1 課　主幹　伊藤裕偉
- 4 調査にかかる諸費用は、三重県県土整備部が負担した。平成 27 年度の予算は、県土整備部から県教育委員会経由で、県埋蔵文化財センターの執行委任事務として処理した。
- 5 本報告の基となる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 6 当報告書の作成業務は当センター調査研究 1 課が行った。報告文の作成と編集は伊藤が行った。
- 7 表紙および本文中に用いた『伊勢新名所繪歌合』（模本）のうち「打越浜」は、所蔵者である神宮徵古館に許可を得てトレースしたものである。許可を頂いた神宮徵古館には厚く御礼申し上げます。
- 8 本書の作成にあたっては、以下の方々から有益なご助言を得た。記して感謝申し上げます。
北原系子

凡　　例

<地図類>

- 1 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の 1/25,000 地形図、2006 三重県共有デジタル地図（平成 23 年測図）、これらの地図は、全て世界測地系（測地成果 2000）に対応している。
- 2 2006 三重県共有デジタル地図は、三重県市町村合事務組合の承認を得て使用した（承認番号：三総合第 93 号）。
- 3 調査区は世界測地系に基づく国土座標第 VI 系での位置を示している。挿図の方位は座標北である。なお、磁針方位は西偏 7° 00'（平成 19 年）である。

<遺構類>

- 4 現地土壤の色調と土質は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社 1967 年初版、2003 年第 23 版）を基準に、調査担当者が現地で目視した状況による。
- 5 当報告書での遺構は、全体で通番をしている。

6 遺構番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けている。

S B …… 挖立柱建物 S E …… 井戸 S K …… 土坑

- 7 遺構は、調査時に付加した遺構番号である。S E 1 は、調査時には「SK 1」としていたが、報告段階で S E 1 に改称した。

<遺物類>

- 8 当報告での遺物実測図類は、実物の 1/4 で示した。

9 実測図のうち、上下の外郭線（口縁部・底部など）に切り目を入れているものは、残存が少ない（1/12 以下）が、既存事例に基づきおおよその大きさを推測して示したものである。

- 10 当報告書での用語は、「わん」は「碗」および「椀」、「つき」は「坏」の字を用いている。

11 遺物観察表は、以下の要領で記載している。

番号 …… 挿図掲載番号である。

実測番号 …… 実測段階の登録番号である。

様・質 …… 「土器部」「須恵器」といった区分をここに示した。

器種など …… 遺物の器種を示す。

遺構・層名 …… 遺物の出土した遺構や層名を記した。

法量 (cm) …… 遺物の法量を示す。(口) は口縁部径、(底) は底部径、(体) は体部径を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での「接地点」ではない。

調整・技法 …… 主な特徴を外面（外：）・内面（内：）で示した。「A→B」は A の後に B が施されたことを示す。

胎土 …… 小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

色調 …… その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に掲げる。

残存度 …… 指示部位を 12 分割した際の残存度を示した。6/12 は約半分、12/12 は全体が残っていることになる。

特記事項 …… 遺物の特徴となるその他の事項を記した。

<写真図版>

- 12 握図と写真図版の遺物番号は、遺物実測図の番号と対応している。

- 13 遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

本文目次

I 調査の契機・経過と行政的諸手続	(1)
1 調査の契機と協議経過	
2 発掘調査の経過と法的措置	
3 発掘調査と記録の方法	
II 遺跡と周辺の諸環境	(4)
1 位置と地形	
2 歴史的環境	
III 調査区の成果～層位と遺構～	(9)
1 調査区の地形と層位	
2 遺構	
IV 調査の成果～出土遺物～	(12)
1 概要	
2 出土遺物の状況	
V 二見の地形と生業～調査のまとめと検討～	(15)
1 唐劍山遺跡の変遷	
2 中世二見の景観と生業	
3 江戸時代後期以降の洪水層と道路の層序	
4 総括	

挿図一覧

第1図 事業地内調査区位置図	第6図 出土遺物実測図
第2図 唐劍山遺跡と周辺の歴史環境	第7図 二見の条里型地割
第3図 唐劍山遺跡周辺地形図	第8図 「伊勢新名所絵歌合」のうち「打越浜」
第4図 調査区平面図および土層断面図	第9図 「打越浜」の画郭構成
第5図 掘立柱建物S B 3・井戸S E 1平面・断面図	第10図 二見の景観復元（12～13世紀頃）
	第11図 二見地区嘉永7年地震津波浸水状況想定

表一覧

第1表 唐劍山遺跡出土遺物観察表

第2表 二見地区嘉永7年地震津波被害状況

挿入写真一覧

写真1 第1回範囲確認調査坑

写真3 御塩殿神社

写真2 宮川河口部

写真版一覧

写真図版 表紙 調査区西壁土層

写真図版4 調査区 遺構（3）

写真図版1 調査前風景・調査状況

写真図版5 出土遺物（1）

写真図版2 調査区 遺構（1）

写真図版6 出土遺物（2）

写真図版3 調査区 遺構（2）

I 調査の契機・経過と行政的諸手続

1 調査の契機と協議経過

a 総説

ここで報告する唐劍山遺跡は、宇治山田港（海岸）海岸浸食対策（工事用道路）工事に伴い、平成 26 年度に調査（記録保存）を実施したものである。事業主体は三重県県土整備部（港湾・海岸課）、実施機関は伊勢建設事務所（以下、伊勢建設）で、調査を三重県埋蔵文化財センター（以下、当センター）が実施した。

b 事前協議の経過

当センターでは、各種の県営公共事業計画について、事前に事業照会を実施している。これは、社会教育・文化財保護課（県教育委員会）・公共事業運営課（県土整備部）と連携しながら、事業実施年度の前年度に開通部局へと打診しているものである。対象は、周知の埋蔵文化財包蔵地かどうかにかかわらず、掘削行為が伴う工事の全てとしている。これは、遺跡不時発見の場合も考慮し、工事の円滑な進行とともに、遺跡の保護にも遺漏が無いようするための次善の策である。

宇治山田港海岸浸食対策工事の計画が当センターに連絡されたのは、平成 25 年 10 月に実施した、平成 26 年度事業にかかる公共事業照会においてであった。事業照会に伴い、遺跡地図で照合したところ、事業地に周知の埋蔵文化財包蔵地は認められなかった。しかし、事業地を中心にして現地踏査を実施したところ、中世土器を中心とした遺物の散布が確認された。そのため、事業地のある伊勢市教育委員会および伊勢建設と協議を行い、平成 26 年 1 月に当地を新発見遺跡として登録する手続きを実施した。

この状況に基づき、同 2 月に当センターと伊勢建設とで改めて取り扱いの協議を実施した。当事業は、平成 26 年度事業として実施される緊急性の高い工事であるため、平成 26 年度の早い段階で範囲確認調査を実施することで合意した。



写真 1 第 1 回範囲確認調査坑（北から）

2 発掘調査の経過と法的措置

a 調査の経過

唐劍山遺跡の事業地は、北半部の畠地（砂堆）部分と、南半部の水田地部分とに区分できる。

【第 1 回範囲確認調査】

第 1 回目の範囲確認調査は、事業地北部の砂堆上を対象に実施した。1 ~ 3 トレンチが概当する。実施日は平成 26 年 4 月 16 日で、調査面積は約 48m²である。

当地は畠地で、橙色系粘土が各所に観察できため、製塙遺構の存在が想定された。しかし調査の結果、これらの粘土は畠地以前に造成されていた競馬場に伴うもので、江戸時代以前の遺構・遺物は全く確認できなかつた。そのため、事業地北半部に関しては、工事着工に問題ないものと判断した。

【第 2 回範囲確認調査】

第 2 回目の範囲確認調査は、事業地南部の水田部を対象に実施した。調査坑 1 ~ 3 が概当する。実施日は平成 27 年 1 月 14 日で、調査面積は約 18m²である。

当地は水田で、事業地内に 3 箇所の調査坑を設定して実施した。その結果、事業地中央に設定した 1 箇所の調査坑から平安時代末期を中心とした土器類が出土し、土坑・ピットなどの遺構も確認できた。この結果、事業地内約 200m²に遺構・遺物の広がり

が想定され、この範囲については工事着工前に発掘調査が必要と認識された。

【発掘調査（立会調査）】

第2回範囲確認調査の結果に基づき、伊勢建設と再協議を行った。工事の期日と緊急性を勘案し、引き続き調査を行うことで合意した。実施日は平成27年1月26日から29日までの実働3日間である。

調査は工事に組み込むかたちの立会調査形式で行った。最終的な調査面積は約130m²である。

b 発掘調査の普及・公開

発掘調査が立会調査であったことと、工事の期日が迫っていたことなどにより、発掘調査後の現地説明会は開催できなかった。調査成果の一部は、当センターが実施した発掘調査の成果報告会である「おもろいもん出ましたんやわ@2014」（平成27年3月14日開催）で、当遺跡出土資料の展示と解説を行った。

c 文化財保護法等にかかる諸通知

当遺跡の発見から発掘調査に至る文化財保護法（以下、「法」）の諸通知は、以下により行われている。

- ・ 遺跡発見通知（法第97条第1項に準拠、県教育長あてセンター所長通知）

平成26年1月29日付、教理第437号

- ・ 発掘調査通知（法第94条、県教育長あて県知事通知）

平成26年4月3日付、伊建第98号

- ・ 遺失物法にかかる文化財の発見・認定通知（伊勢警察署長あて県教育長通知）

平成27年2月16日付、教委第12-4432号

3 発掘調査と記録の方法

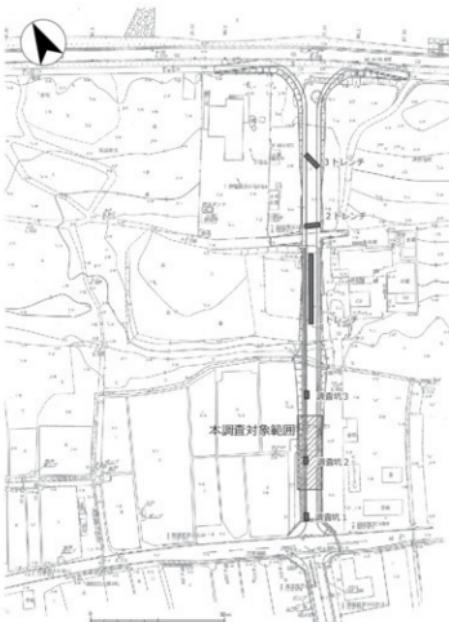
a 掘削の方法

調査は工事立会形式である。重機による掘削を進め、遺構や遺物が確認されたところで人力掘削に切り替える方法で行った。

b 地区設定と遺構番号

調査地は狭隘なため、地区設定は行っていない。遺構番号は、アルファベット略号の後に、今回確認した遺構（1～3）を付加した。ピット（小穴）は前述の遺構とは別に番号を付与した。

d 出土遺物の回収



第1図 事業地内調査区位置図

出土遺物には、出土遺構と出土年月日を記載した専用のラベルを現地で付与した。また、小地区割りを行っていないため、遺構に伴わない遺物は出土土地点や層がわかる表記を与えた。遺物類は当センターへ搬送し、洗浄などの作業を行った。

e 遺構図面

掘削終了後、調査区全体図を1/20の縮尺で記録した。略測図（遺構カード）は作成せず、調査日誌の記録で代用した。

f 遺構写真

調査の状況は、デジタルカメラの記録のみである。

g 記録類

以上にかかる発掘調査の記録類は、調査関連図面（平面図・土層断面図など）、調査日誌、写真類（デジタル画像）がある。これらは、所定の番号を与え、当センター専用収蔵スペースで保管している。



第2図 唐劍山遺跡と周辺の歴史環境（国土地理院1/25,000地形図「伊勢」「明野」「二見」「鳥羽」より）

II 遺跡と周辺の諸環境

1 位置と地形

唐劍山遺跡のある三重県伊勢市二見町は、宮川と五十鈴川の河口部に形成された平地を中心に広がっている。二見町には国指定名勝「二見浦」があり、風光明媚な海岸地形が見られる。

丘陵地形 二見町近隣の地形の特徴を簡単に言えば、沈降海岸（リ亞ス式海岸）の縁辺に形成された砂丘、ということになろう^①。二見町の南部には、五峯山（標高約67m）・音無山（同約120m）などの低丘陵が東西に連なる。その南麓には五十鈴川派川が東流し、さらに南には朝熊山山系がやはり東西方向に派生する。これらは、日本列島を東西に横断する中央構造線の外帯にあたる丘陵である。丘陵の地質は、長瀬帶（御荷鉢帶）にあたる変成岩で、緑色岩や結晶片岩が露呈している。当地の東方にある志摩半島北部の、鳥羽から答志鳥にかけて見られる岩質と基本構造は同じである。

海岸地形 さて、二見地区海岸部には沈降海岸地形が見られない。これは、宮川から排出される膨大な土砂による影響が大きい。

宮川は紀伊山地北部の大台ヶ原を水源とする、伊勢湾西岸部屈指の河川である。中上流部は河川の開削作用による深い渓谷が各所で見られ、独特的な自然景観をなしている。そして、その結果として排出された土砂は、河口部に広大な沖積地を形成している。地形環境を見る限り、宮川から排出された土砂は、二見地区を東限に、北西は大淀地区（明和町・伊勢市）までの、海岸線延長約16kmの沖積地形成に深く関与しているものと考えられる。とくに東西両端の二見地区・大淀地区には、長大な砂州（浜堤帶・砂堆。以下「砂堆」で統一）が数条形成されている。

これらの砂堆と宮川河口との間には、それぞれに内水面を擁している。河口の北西部では、有瀧・磯・東浜などの集落が内水面の周間に点在しており、そこに外城田川が注いでいる。宮川河口西部では、今一色・一色・神社港・下野・大湊といった集落に囲まれた広い内水面があり、五十鈴川がそこに注い



写真2 宮川河口部（朝熊山山頂から北を望む）

でいる。外城田川・五十鈴川は、宮川水系とは別の河川だが、いずれの河口も河川規模と比べて不釣り合いなほど大きい。これは、外城田川・五十鈴川それぞれが単独で形成したものではなく、宮川とその排出土砂によってそこに砂堆が形成され、外城田川・五十鈴川が関わることで形成された潟湖の影響による。なおこの潟湖は、ある時期にはここに宮川本流の河口があったことを示唆している^②。

二見の砂堆 砂堆は、新しいものほど現在の海岸線に近づく。山本威氏の分析によると、二見の砂堆は4条認められる^③。

- ①溝口・山田原・三津にかけて（砂堆I）
- ②中須垣内から山田原にかけて（砂堆II）
- ③今一色・西村・莊から茶屋にかけて（砂堆III）
- ④二見浦・北浜から立石崎にかけて（砂堆IV）

二見地区的砂堆は、東端の音無山山麓付近を基点に、あたかも扇を開いたかのようにその角度が異なり、北に跳ね上がっている。それぞれの砂堆を見ても、その西端部には入り乱れがある。形成段階に宮川から膨大な土砂が供給され、それが沿岸流の流れを変えるまで影響を及ぼしていたのであろうか。

それぞれの砂堆は最高所で3m程度で、二見の砂堆西端は内水面と接するため、おそらくは砂堆の間に擗衝状態で潟湖が入り込んでいたと考えられる。砂堆III・IVの西端は接続しており、その間が海跡湖となっていた段階があったと考えられる。

2 歴史的環境

二見地区周辺の歴史的諸環境について、既存の調査や資料に基づいて概観する⁽⁴⁾。

a 古代以前の二見地区

旧石器・縄文時代 宮川河口低地部では、西岸の微高地に上に旧石器時代以降の遺跡が数箇所確認されている。標高約1.7mの圓之内遺跡（伊勢市村松町）ではナイフ型石器が採集されている。発掘調査は実施されていないので断定できないものの、三重県下で最も海岸寄りにある旧石器時代遺跡として注目されている。宮川河口西岸部では、この遺跡以外にも旧石器時代から縄文時代の遺物が採集されている。とくに近鉄五十鈴川駅南に接した丘陵上にある桶子遺跡・宮後遺跡（伊勢市中村町）では、旧石器時代のまとまった石器類が採集されている。今後の実態解明が期待される。

縄文時代では、宮川中流域に佐八藤波遺跡（伊勢市佐八町）がある。佐八藤波遺跡は宮川流域を代表する縄文遺跡で、中期・後期・晚期の縄文土器・石器がまとまって出土している。佐八藤波遺跡近傍には複数の縄文遺跡があり、宮川中流域における縄文時代の活動が活発であったことを物語っている。この一方、宮川河口部の低地部では、今のところ縄文時代の明確な遺跡は確認されていないが、莊遺跡では縄文時代にまで遡る可能性のある石礫が出土している。伊勢湾西岸部の砂堆上や低地部からは、近年の発掘調査で縄文遺跡の発見が相次いでいる⁽⁵⁾。二見地区でも、前述の砂堆Ⅰや砂堆Ⅱの上にある三津遺跡などで縄文時代の遺構・遺物が発見される可能性は高いと考えられる。

弥生時代 弥生時代前期の遺物は、宮川河口部西岸の大藪遺跡（伊勢市磯町）で出土している。二見地区では、砂堆Ⅰの東端にあたる三津遺跡が、前述のように縄文時代から継続する集落遺跡の可能性が高い。三津遺跡からは伊勢湾東岸部の三河地域（愛知県）との関係が強い中期弥生土器が出土しており⁽⁶⁾、海を介した交流の存在を物語る資料として三重県有形文化財（考古資料）に指定されている。

弥生時代後期では、前出の大藪遺跡で方形周溝墓が検出されている。近年の調査で、同じく低地部にあたる西垣外遺跡（伊勢市柏町）でも後期の環濠か

と考えられる大規模な溝が確認されている⁽⁷⁾。弥生時代を通じ、人びとの活動は低地部に広く及んでいたと考えられる。

古墳時代 古墳時代の集落遺跡も、二見地区では砂堆Ⅰ・Ⅱを中心に行なわれていたと見られる。具体的には三津遺跡近傍にこの時期の集落遺跡が営まれていたと考えられる。莊遺跡の発掘調査では、包含層中ではあるが5世紀後葉から6世紀後葉にかけての土師器・須恵器のほか、7世紀中頃の堅穴住居と考えられる遺構が確認されている⁽⁸⁾。

二見地区を含む宮川下流域では、前方後円墳はじめとした大型の古墳が形成されない、という点に特色がある。宮川中流域に営まれた、前末期から後期前半にかけての群集墳である落合古墳群（伊勢市津村町）が当地の最古級古墳群にあたる。落合古墳群は、中期以前の大型古墳が見られない地域における小規模古墳のあり方を典型的に示すものである。

古墳時代後期になると、宮川下流域の丘陵部にも古墳の築造が確認できる。二見地区でも五峯山古墳群・三津古墳群・山田原古墳群などが見られる。これらは散在する2・3基程度がまとまる後期古墳群である。赤土山古墳群（伊勢市鹿海町）は2基で構成される6世紀前半の小規模古墳群だが、鹿・馬・家などを含む精緻な形象埴輪を用いている。五峯山2号墳・前山古墳（伊勢市鹿海町）・外佐田古墳（伊勢市二見町松下）などの横穴式石室を主体部とした古墳は、6世紀後半から7世紀中葉にかけて順次営まれていた。

現在では二見地区の西を本流とする五十鈴川は、旧伊勢・志摩国境付近を水源に神宮内宮を経由して流れる小規模河川だが、この中流域では特徴的な古墳群の形成が見られる。南山古墳や星河古墳群（伊勢市鹿海町）では、横穴式木室という当地独特の埋葬施設が見られる。星河古墳群と近接する杉葉崎遺跡（伊勢市朝熊町）では、落ち込み地形から7世紀前半代の土師器・須恵器がまとめて出土しており、土器流通に何らかの関係がある遺跡と考えられる。

古墳時代後期末頃には、外宮神域にある高倉山古墳（伊勢市豊川町）が築造される。全長18.5mの長大な横穴式石室は、全国的にも屈指の規模を誇る。高倉山古墳は神宮（外宮）成立に関しても大きく関

与する記念碑的な構造物として注目できる。

b 古代・中世の二見地域

古代の郷 古代律令期の二見地区は、伊勢国度会郡に相当する。『和名類聚抄』⁽⁹⁾ には度会郡内に二見郷が記載されており、当地と考えてよいだろう。古代二見郷の範囲を明確に示す素材は無いが、伊勢市二見町に相当するエリアは概ね古代律令期の二見郷に相当すると見てよいと考えられる。

条里型地割 条里型地割の成立時期は地域によって異なるが、最近の発掘調査成果によると、伊勢平野部の条里型地割は、平安時代後期以降に形成されている可能性が高いと考えられる⁽¹⁰⁾。

広義の宮川下流域では、勢田川・五十鈴川流域に条里型地割の痕跡が確認できる。このなかで、最も海岸寄りに条里型地割が認められるのが二見地区で、砂堆Ⅱと砂堆Ⅲとの間の低地部に展開している⁽¹¹⁾。文献史料に登場した条里呼称を稲本紀昭氏が検討しており、古代二見郷は六条に相当する⁽¹²⁾。

集落遺跡 二見地区的奈良・平安時代に相当する集落遺跡は判然としない。莊遺跡の発掘調査では、奈良時代の須恵器が少量出土している。前代同様、砂堆Ⅰ・Ⅱを中心にして集落遺跡が展開しているものと思われる。

平安時代の集落遺跡もよく分からぬ。宮川下流域にあたる高向遺跡では、この時期の縄袖・灰陶陶器が比較的多く出土している⁽¹³⁾。二見地区内も、未確認とはいえるこの時期の集落遺跡が展開していると考えられる。

平安時代末期から鎌倉時代前期にかけての遺跡は、宮川流域では数多く確認されている。二見地区では莊遺跡や莊北遺跡などがある。莊遺跡からはこの時期の掘立柱建物や井戸などが数多く確認されている。

二見御厨と製塩 二見御厨の展開を、稲本紀昭氏による研究⁽¹⁴⁾に振りながら概観する。二見御厨の名は、建仁元(1201)年にはじめて登場する。中世には「二宮御厨鹽所御厨」として、神宮へ貢納される鹽を生産していた。

二見地区には、現在も御塙殿神社や御塙浜など、神宮に関連した製塩関連施設が存在しており、その淵源は古代に遡ると考えられる。砂堆Ⅱと砂堆Ⅲと



写真3 御塙殿神社

の間には「御塙田」の小字があり、塙田の存在が想定できる。稲本紀昭氏は、古代末期の段階で「御塙田」の小字が残る地が「治田」として売買されており、かつての製塩の場が農耕用の水田として開発されていったことを検討している。

経塚と寺院 平安時代末期には、外宮近隣の丘陵部に多くの経塚が形成される。二見地区の南方にある朝熊山山中にある朝熊山経塚、小町塚経塚や蓮台寺塚ノ口経塚などが著名である。二見地区でも、豆石山経塚が造られた⁽¹⁵⁾。これらで確認されている経筒の銘により、神宮の神職が埋經に数多く参加している実態が窺われる。

つぎに、寺院である。五峯山丘陵裾には安養寺跡がある。ここでは12世紀後半で瓦を伴った堂宇のほか、湿润な地形が幸いして墨書き本簡や絵画などが多く出土した⁽¹⁶⁾。用いられた瓦は京都の技法から直接影響を受けたものであり、安養寺と京都とが密接に関係していることを示している。安養寺跡は西行の旧跡との伝承もあり、あながち否定できない状況証拠が見られる。

二見地区的寺院には、大江寺のほか、薬師寺・宝蓮寺・密嚴寺・中福寺・常泉寺・天覺寺などがあつた⁽¹⁷⁾。大江寺は今も健在で、十一面千手觀音菩薩坐像（国重要文化財）を本尊とする。天覺寺はその所在地が不明だが、文治2(1186)年に後乗坊重源一行が東大寺再興祈願にあたって逗留した寺院として著名である。現在の三津にある明星寺には、密嚴寺・宝蓮寺などにあったとされる木造阿弥陀如來坐像（県有形文化財）・木造藥師如來坐像（国重要文化財）・木造不動明王立像などの平安時代後期の秀麗な仏像

が安置されている。

二見から内宮にかけての五十鈴川流域には、弘正寺・神宮寺などの重要寺院が点在していた。弘正寺跡は楠部町にあった律宗寺院で、伊勢国筆頭の西大寺末寺であった⁽¹⁸⁾。神宮寺は内宮にほど近い菩提山の山中にあり、密教系寺院であったと考えられる⁽¹⁹⁾。城館 室町・戦国期に至ると、各地に城館が造成される。二見地区でも音無山の頂部に仁木城跡、音無山城跡、江山城跡などが点在している⁽²⁰⁾。これらは比較的小規模な城館で、当地に強大な領主権力が出現していないことを示している。

c 近世の二見地域

織豊期から江戸初期の二見 中世後期の二見地区の支配には神宮が関与していたと考えられる。織豊後期には九鬼氏の支配が及んでいたようだが、寛永10（1633）年には神領に復帰し、山田三方に属したという⁽²¹⁾。九鬼氏の支配以前にも、二見には山田三方の影響があったと考えられる。嘉永（安政）大地震に伴う被害届は山田三方に対して報告されていてからも、山田三方の支配は江戸期を通じて行われたと考えられる（第V章）。山田は中世後期から近世にかけての都市遺跡で、近年調査された高河原遺跡では、都市遺跡の一角に相応しく、近世を通じた様々な出土遺物があった⁽²²⁾。

江戸時代の二見地域は、荘村・三津村・山田原村などの複数村に区分されて支配されており、そのまま現在の大字へと継続している。

【註】

- (1) 当地の地形的特徴については、川瀬久美子「伊勢平野南部、宮川下流域における沖積層の層序と埋没地形」（『愛媛大学教育学部紀要』59、2012年）などを参照した。
- (2) 伊藤裕偉「中世伊勢湾岸の湊津と地域構造」（岩田書院、2007年）。
- (3) 山本威「莊遺跡付近の地形と地質」（三重県教育委員会「莊遺跡発掘調査報告」1980年）。
- (4) 以下、遺跡の状況については伊勢市編『伊勢市史』第6巻考古編（2011年）を主な参考文献とした。この文献以外に詳細な記述のあるものについては、適宜参考文献を掲げた。
- (5) 松阪市和屋町・立田町・朝田町の県営農業基盤整備事業に伴い、駿町遺跡・朝見遺跡・中坪遺跡などが発掘調査され、縄文時代後期の良好な土器群や集落遺跡が確認されている。当地は標高10m内外の沖積地で、伊勢平野部の縄文遺跡を考える上で極めて重要である。遺跡群

の概要是、三重県埋蔵文化財センター「水と大地といにしへの人びと」（2015年）を参照されたい。また、平成26年度には多気郡明和町大字行部にある西浦遺跡の発掘調査が明和町によって実施され、縄文時代中期の良好な土器が出土し、注目された。

- (6) 前掲註（3）『莊遺跡発掘調査報告』。
- (7) 「西班外遺跡」（三重県埋蔵文化財センター「平成22～24年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告」2013年）。
- (8) 前掲註（3）『莊遺跡発掘調査報告』。以下、莊遺跡に関する文獻に拠る。
- (9) 京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄』（1968年、臨川書店）。
- (10) 三重県埋蔵文化財センター「朝見遺跡（第1・2次）発掘調査報告」（2014年）。
- (11) 倉田康夫「飯高・度会郡の条里制」（『伊勢清岸地域の古代条里制』東京堂出版、1979年）。
- (12) 稲本紀昭「中世の二見御厨」（前掲註（3）文献）。
- (13) 三重県教育委員会「南勢ハイバス埋蔵文化財発掘調査報告」（1973年）。
- (14) 前掲註（12）稲本氏論文。
- (15) 二見町教育委員会「安養寺跡・豆石山中世墓群・豆石山経塚群・五峯山2号墳」（2004年）。
- (16) 前掲註（15）文献。
- (17) 二見町編『二見町史』（1988年）。
- (18) 松尾剛次『中世律宗と死の文化』（吉川弘文館、2010年）。
- (19) 石井昭郎「伊勢神宮寺と菩提山」（『瑠璃』516、神宮寺序、1988年）。
- (20) 三重県教育委員会「三重の中世城館」（1977年）。
- (21) 平松令三監修『三重県の地名』日本歴史地名体系第24巻（平凡社、1983年）。
- (22) 三重県埋蔵文化財センター「高河原遺跡発掘調査報告」（2015年）。

【参考文献】

- ・伊勢市民俗調査会編『伊勢市の民俗』（1988年）。
- ・伊勢市教育委員会『伊勢市の文化財』（1981年）。
- ・伊勢市教育委員会『琵河古墳群』（1993年）。
- ・伊勢市編『伊勢市史』第2巻中世編（2012年）、第3巻近世編（2013年）、第6巻考古編（2011年）。
- ・宇治山田市役所編『宇治山田市史』上巻、1929年、1988年復刻、国書刊行会）。
- ・千枝大志『中近世伊勢神宮地域の貨幣と商業組織』（岩田書院、2011年）。
- ・西山克『道者と地下人～中世末期の伊勢～』（吉川弘文館、1987年）。
- ・平松令三監修『三重県の地名』日本歴史地名体系第24巻（平凡社、1983年）。
- ・三重県教育委員会『三重県石造物調査報告』I（2009年）、2（2013年）。



第3図 唐劍山遺跡周辺地形図

III 調査の成果～層位と遺構～

1 調査区の地形と層位

a 調査地の地形

調査地は、伊勢市二見町莊の集落北西部で、伊勢湾に面した低地部にある。現況は、事業地北部が畑地、同南部が水田である。事業地の東約300mには御塩殿神社がある。事業地の標高は、北部で約4m、南部では約2mである。第Ⅰ章で触れたように、遺構・遺物が確認できたのは事業地南部のみである。

当地は伊勢湾沿岸部に形成された砂堆上にある。事業地北部は、比較的新しい堆積作用で形成された砂堆で、4mほどの高さになっている。

遺構が確認されたのは事業地南部で、調査区は東西65m、南北約22mの規模である。調査区の中央は、近年の開発（農作業小屋建設）によって大きく破壊されていた。

b 調査区の基本層序

当地的層序を、基本土層圖で観察する（第4図）。基本層序は、第Ⅰ層：耕作土および旧耕作土（同図1・3層）、第Ⅱ層：黄色系細砂（同図4・5層）、第Ⅲ層：褐色系シルト質細砂（同図6～8層）、第Ⅳ層：褐色系細砂（同図第12層）で、第Ⅳ層が遺構基盤土となる。当地は砂堆上であるため、全ての層は砂、とくに細砂を基本として構成されている。

第Ⅰ層は、現在の水田面耕作土を含む層で、厚さ20cm程度である。旧耕作土（3層）の正確な時期は不明だが、現代耕作土とはそれほど離れない時期にあると見られる。ややシルト質である。

第Ⅱ層は、10cm程度の層（4層）と、最大厚40cmに及ぶ層（5層）とで構成される。5層と4層は同質の層だが、その境は明瞭で、時期差のあることは確実である。5層は厚みがありながらも、地点による違いは無く、全体が均質な細砂で構成されている。その状態から短期間に形成された層と考えられ、洪水性の層である可能性は極めて高いと考えられる。この層からは、少量だが江戸時代後期以降の遺物が出土している。

第Ⅲ層はシルト質の層で、北部では1層分（8層）、

南部では薄い細砂層（7層）を挟んで2層分（6・8層）が確認できる。前述の第Ⅱ層が形成される直前までの耕作土に相当すると考えられる。この層からは江戸時代後期頃の遺物が出土している。

第Ⅳ層は細砂層で、第Ⅰ～Ⅲ層と比べ締まりが強い。当初からの砂堆構成土と考えられ、上面の標高は約1.1mである。この層上面に、後述の中世遺構が見られる。第Ⅳ層の厚みは40cm以上であることは確認したが、それ以下は湧水のため確認できなかった。

なお、第Ⅳ層上面は、場所によっては赤褐色を呈している。これは、遺構の赤変（後述）以外に、上層部から沈降してきた鉄分の沈着に起因するものもあると考えられる。

2 遺構

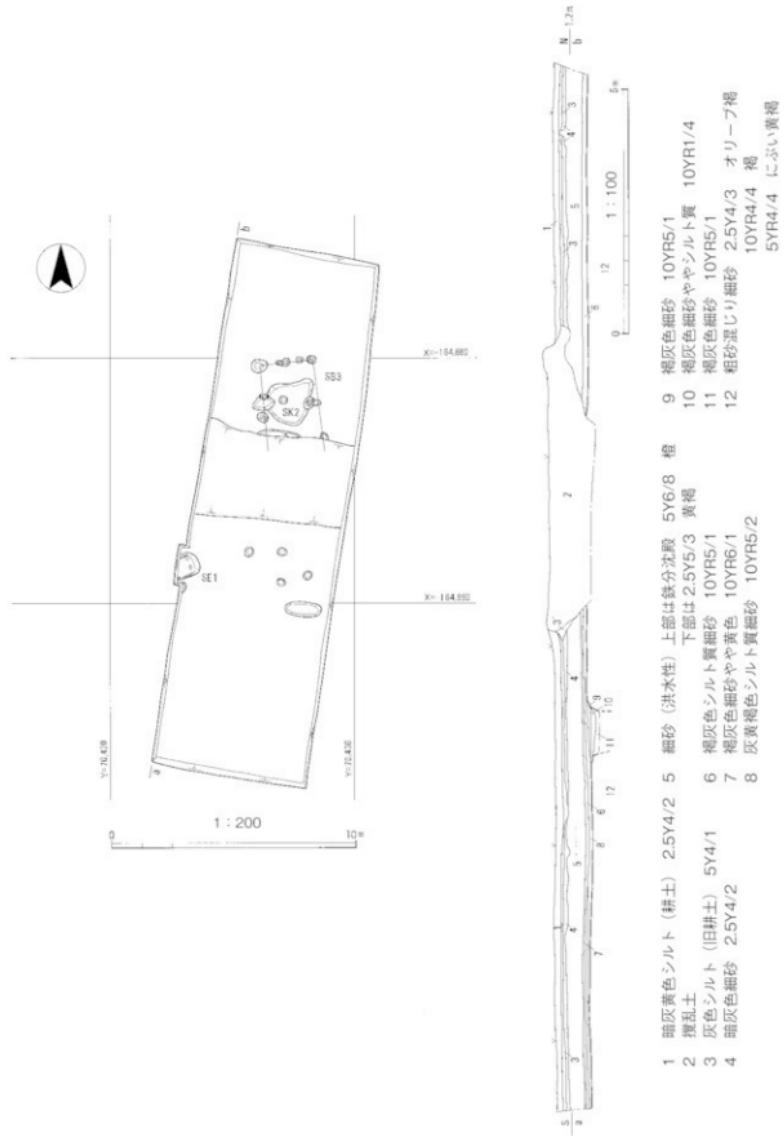
確認した遺構は、掘立柱建物1棟、井戸1基、土坑1基である。

掘立柱建物 S B 3（第5図） 調査区北部で確認した遺構である。南北棟と考えられ、主軸方位はN7°Wである。南端は擾乱坑で破壊されている。北面の梁間は約2.2mで、中央の柱穴を基準に2間あるが、東側柱間の中央にはさらに柱穴がある。南北の桁行は2間分（約3.2m）が確認できる。建物の中央には不定形な浅い土坑SK2がある。S B 3と一連の遺構と考えられる。

建物周囲の地盤は赤変が見られた。当初、この赤変は土壤内の鉄分沈着と思われた。実際、現在の地割に沿って数設された鉄柵の下が強く赤変していた。しかし、S B 3周辺の赤変部には炭化物が混じっていること、周辺から少量だが鉄滓が見られたことなどから、建物周囲の赤変は、鍛冶に伴うもので、建物は工房に相当する可能性が高いと判断できる。

柱穴内から、陶器・土師器類が出土している。出土遺物は南伊勢中世Ia期（11世紀後半）の時期のものである。

井戸 S E 1（第5図） 調査区南部西端で確認した木組の井戸である。南北幅95cm、東西幅1.1m以上



第4図 調査区平面図および土層断面図

の掘形内に、縦板組の井戸枠を構成していると考えられる。縦板は北面のみ比較的高い位置で確認したが、東面・南面については確認していない。掘削範囲が狭いためこの井戸は完掘できなかったが、下部では木組全体が遺存していると思われる。南面の東端には立杭が遺存していた。これは縦板組の隅部を固定する部材と考えられる。これらの遺存部材から、井戸枠は東西70cm程度の小規模なものであったことがわかる。

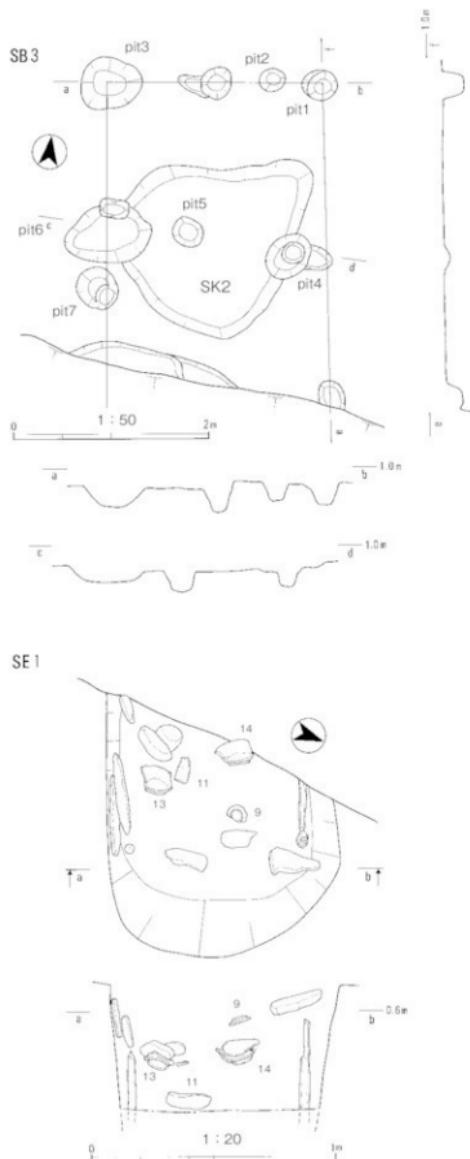
木組枠の上部は石材を用いて固定していたようである。南面上部から薄く剥離した結晶片岩が2枚、壁面に貼り付いた状態で確認された。木組枠内にも、元は上部構造材と考えられる長軸20cm程度の結晶片岩・綠色岩・花崗岩の自然礫が落ち込んでいた。

井戸埋土上層に相当する位置から、土師器・陶器類がまとめて出土している。尾張型山茶碗の第3型式に相当するものがある。南伊勢中世Ia期に相当すると考えてよいだろう。

土坑SK2 調査区北部で確認した遺構である。長軸約2m、短軸約1.7mの不整形で、検出面からの深さは約15cmである。先述のようにSB3の内側に収まるので、両者は一連の遺構である可能性が高い。遺構内からは、南伊勢中世Ia期の遺物が出土している。

【参考文献】

- ・伊藤裕作「南伊勢・志摩地域の中世土器」
〔三重県史〕資料編考古2、2008年)。
- ・藤澤良祐ほか「愛知県史」別編産業2
中世・近世漁業系(2007年)。



第5図 挖立柱建物SB3・井戸SE1 平面・断面図

IV 調査の成果～出土遺物～

1 概要

今回の唐劍山遺跡調査で出土した遺物は、整理箱に2箱（約5.1kg）である。内訳は、奈良時代から江戸時代にかけての土師器・須恵器・陶器類のほか、鉄製品生産にかかると見られる鉄滓も少量出土した。また、井戸S E 1の井戸枠構成材として木枠・杭があったが、これは抜き取ることができなかつたため、現地に残置している。

実測図を第6図に示した。図示した遺物の出土地点や詳細については、出土遺物観察表（第1表）を参照されたい。

2 出土遺物の状況

井戸S E 1出土土器（1～15） 道構上層部から出土した、比較的まとまりの良い一群である。

1～3は土師質土器（ロクロ土師器）。いずれも小皿形態。1・2は口縁部。口縁部は外反し、外側に面をなす。3は底部。底は糸切りされる。

4は土師器皿。口縁部外面には幅の狭いヨコナデが施される。内面にも弱い面があり、口縁端部の断面は三角形状を呈している。

5～7は土師器甕。5は体部最大径8.6cmの小形のもので、実用品ではなくミニチュア甕とでもいいくべきものである。6は口縁端部を内側に折り返すもの。7は、基本形は6と同じだが、口縁端部は外側に面をなしている。体部外面は、指オサエ調整の後、斜め方向のナデを施している。

8～15は陶器。いずれも涅美產と考えられる。8・9は小碗で、高台の断面は三角形状を呈する。8の口縁部は外反せず、底部からそのまま開く。10～15は碗。灰釉の付着は無く、いわゆる「山茶碗」である。いずれも口縁部は外反する。高台は、14・15は断面三角形状、12・13は断面方形を呈している。

これらの土器は、陶器碗類は藤澤良祐による山茶碗編年^①の第3型式、土師器類は南伊勢中世I a期^②に相当する。概ね11世紀後葉頃のものである。**土坑SK 2出土土器（16・17）** 16・17は、いづれ

も土師器甕。16は口縁端部内面を内側に折り返すもの、17は折り返しが無く、口縁端部上に面を有する。いずれも南伊勢中世I a期に相当する。

なお、SK 2からは鉄滓片も出土している（写真図版5）。

掘立柱建物S B 3関係出土土器（18～24） 掘立柱建物を構成するピットから出土した遺物である。

18～20はpit 3出土。18は土師質土器の椀。高台が付くもので、南伊勢地域ではよく見られる。19は陶器碗で涅美產。20は土師器甕。

21はpit 2出土の土師器皿。口縁部にヨコナデを施す。22はpit 4出土の土師器甕。

23・24はpit 5出土。23は土師器甕。24は製塙用土釜の体部片。素地は粗い。断面には成形時の擬口縁が観察できる。

これららの遺物は、概ね南伊勢中世I a期に相当すると考えてよいであろう。

褐灰色シルト層出土土器（25～31） 中世道構面の上、洪水層と見られる黄灰色細砂砂の下に形成された褐灰色シルト層から出土した遺物である。

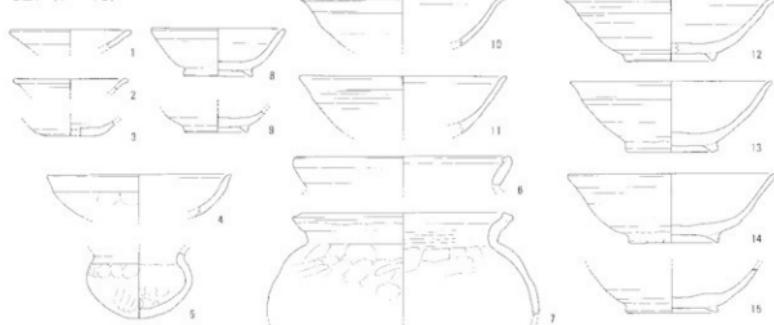
25は土師器甕。水らく水に揉まれていたのか、激しく摩滅している。奈良時代頃の遺物と考えられる。26は陶器壺の底部。高台部は欠損している。11世紀から12世紀にかけてのものと考えられる。

27・28は土師器皿。近世南伊勢系で、南伊勢近世II期^③（18世紀代）に相当すると考えられる。29は磁器小壺で、口縁部は鐘反形をなす。瀬戸产と考えられ、19世紀代のものと考えられる。30は肥前産磁器碗で、内面には呉須筆描の文様がある。18世紀後半から19世紀前半頃のものと考えられる。31は陶器筒形香炉で、近世瀬戸焼の第7小期（18世紀中葉）^④に相当すると考えられる。

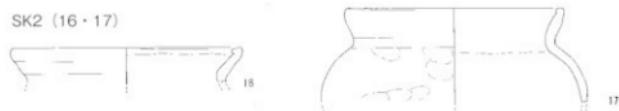
【註】

- (1) 藤澤良祐『中世瀬戸窯の研究』（高志書院、2008年）。
- (2) 伊藤裕作『中北勢地域の中世土器』（三重県史』資料編考古2、2008年）。
- (3) 三重県埋蔵文化財センター「高河原遺跡発掘調査報告」（2015年）。
- (4) 藤澤良祐ほか『愛知県史』別編窯業2中世・近世瀬戸系（2007年）。

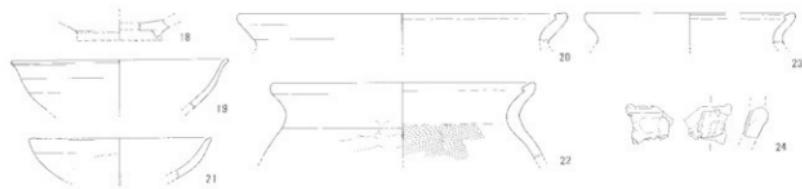
SE1 (1 ~ 15)



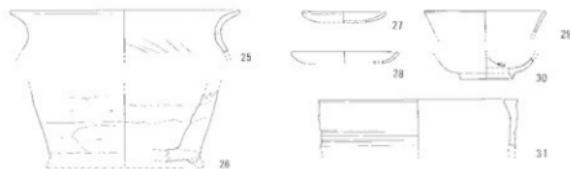
SK2 (16 + 17)



SB3 (18 ~ 24)



褐色シルト層 (25 ~ 31)



0 20cm

第6図 出土遺物実測図 (1 : 4)

第1表 唐創山遺跡出土遺物観察表

番号	実測番号	種・質	器種等	調査区	通巻・番号等	法量(cm)	調整・挂法の特徴	出土	色 調	残存度	特記事項
1	2-5	土師質土器	小皿	南部	SE1	□110. 0	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁1/12	「ロクロ土師器」
2	2-6	土師質土器	小皿	南部	SE1	□10. 4	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	密	10YR8/4 淡黄橙	口縁2/12	「ロクロ土師器」
3	2-7	土師質土器	小皿	南部	SE1	周6. 4	内:ロクロナデ→赤切り 外:ロクロナデ	密	10YR8/3 淡黄橙	底4/12	「ロクロ土師器」回転方向不明
4	3-1	土器器	皿	南部	SE1	□115. 0	内:オサヌクナデ→3コナデ 外:ココナデ	密	10YR8/4 淡黄橙	口縁1/12	南伊勢
5	2-8	土器器	小型盤	南部	SE1	周7. 3	内:オサヌクナデ→3コナデ 外:ナナニコナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	周3/12	南伊勢 ニニチュア品
6	2-3	土器器	盤	南部	SE1	□118. 0	内:ココナデ 外:ココナデ	密	2SYR7/2 灰白	口縁1/12	南伊勢
7	2-1	土器器	盤	南部	SE1	□118. 0	内:オサヌクナデ→3コナデ 外:ナナニクナデ→3コナデ	密	10YR7/2 にぶい黄橙	口縁4/12	南伊勢 口縁端部に面を持つ
8	2-10	陶器	小瓶(山茶瓶)	南部	SE1	□10. 9	内:ロクロナデ→赤切り→貼付窓台→3コナデ 外:ロクロナデ	密	2SYT/1 灰白	底11/12	短多・横投 内面に窓付着
9	2-9	陶器	小瓶(山茶瓶)	南部	SE1 6.1	周6. 5	内:ロクロナデ→赤切り→貼付窓台→3コナデ 外:ロクロナデ	密	2SYT/1 灰白	底8/12	埋美
10	1-4	陶器	瓶	南部	SE1	□116. 8	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	密	2SYT/1 灰白	口縁2/12	埋美
11	1-5	陶器	瓶(山茶瓶)	東部	SE1 6.2	□17. 0	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	密	SYR6/3 にぶい橙	口縁3/12	埋美 口縁部研磨
12	1-1	陶器	瓶(山茶瓶)	東部	SE1	□17. 2	内:ロクロナデ→赤切り→貼付窓台→3コナデ 外:ロクロナデ	密	SYT/1 灰白	口縁3/12 底6/12	埋美
13	1-2	陶器	瓶(山茶瓶)	東部	SE1 6.3	□116. 4	内:ロクロナデ→赤切り→貼付窓台→3コナデ 外:ロクロナデ	密	2SYT/1 灰白	口縁4/12	埋美 外面に自然剥離 高台・内面研磨
14	1-3	陶器	瓶(山茶瓶)	東部	SE1 6.4	□17. 0	内:ロクロナデ→赤切り→貼付窓台→3コナデ 外:ロクロナデ	密	2SYT/1 灰白	口縁4/12 底6/12	埋美 内面に変ね剥き底(研磨ナシ) 高台に施底
15	1-4	陶器	瓶(山茶瓶)	東部	SE1	周6. 7	内:ロクロナデ→赤切り→貼付窓台→3コナデ 外:ロクロナデ	密	2SYT/1 灰白	高台12/12 口口右回転	埋美 内面に変ね剥き底(研磨ナシ) 高台に施底
16	2-4	土器器	盤	北部	SK2	□119. 0	内:ココナデ 外:ココナデ	密	2SYR/2 灰白	口縁1/12	南伊勢
17	2-2	土器器	盤	北部	SK2	□118. 0	内:オサヌクナデ→3コナデ 外:ナナニコナデ	密	2SYR/2 淡黄橙	口縁2/12	南伊勢
18	5-2	土師質土器	瓶	北部	p13	周6. 5	内:ロクロナデ→赤切り→貼付窓台→3コナデ 外:ロクロナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	底2/12	「ロクロ土師器」
19	5-4	陶器	瓶(山茶瓶)	北部	p43	□117. 8	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	密	2SYR/1 灰白	口縁1/12	埋美
20	4-2	土器器	盤	北部	p13	□126. 6	内:ココナデ 外:ココナデ	密	10YR8/3 にぶい黄橙	口縁1/12	南伊勢
21	4-1	土器器	皿	北部	p12	□14. 8	内:オサヌクナデ→3コナデ 外:ナナニコナデ	密	10YR5/2 皮黃褐	口縁1/12	南伊勢
22	5-1	土器器	盤	北部	p14	□120. 7	内:オサヌクナデ→3コナデ 外:ロケマーヌコナデ	密	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁1/12	南伊勢
23	5-3	土器器	盤	北部	p15	□127. 2	内:ココナデ 外:ココナデ	密	10YR8/3 淡黄橙	口縁1/12	南伊勢
24	5-5	土器質 土器	盤	(複数) 3.8	p15	内:オサヌクナデ 外:オサヌクナデ	粗	SYR6/6 橙	体形片	製塩用土器	
25	4-5	土器器	盤	南部	複数	□118. 6	内:濃赤色 外:濃赤色(体形にいくつの底跡)	密	SYR7/4 にぶい橙	口縁1/12	摩滅弱者
26	4-6	灰陶陶器	盤	中央部	複数色シルト	□121. 1	内:ロクロナデ→貼付窓台→3コナデ 外:ロクロナデ	密	2SYT/1 灰白	底2/12	埋投?
27	4-3	土器器	小皿	南部	複数色シルト	周6. 7	内:オサヌクナデ 外:オサヌクナデ	密	SYR6/6 橙	口縁1/12	南伊勢 近世Ⅲ期
28	4-4	土器器	小皿	北部	複数色シルト	周6. 6	内:オサヌクナデ 外:オサヌクナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁2/12	南伊勢 近世Ⅲ期
29	4-7	磁器	小坪	北部	複数色シルト	□19. 9	内:ロクロナデ→焼附 外:ロクロナデ→焼附	密	NB/0 灰白 □10YR8/6 剥离黄	口縁1/12 基戸?	胎は口縁部のみ褐色を呈する
30	4-9	磁器	碗	北部	複数色シルト	周6. 4. 3	内:ロクロナデ→焼附 外:ロクロナデ→焼附	密	NB/0 灰白	高台1/12	肥桃 瓢谷付は露胎
31	4-6	陶器	茎形炉	中央部	複数色シルト	□16. 2	内:ロクロナデ→底灰→焼附 外:ロクロナデ→焼附	密	10YR8/2 黑褐	口縁1/12	埋投・知多 高台に粗粒底 内面研磨
32	金屬塊	鐵	洋	北部	SK2付近 赤褐色砂	□16. 4					写真図版に掲載
33	金屬塊	鐵	洋	南部	SE1	□16. 4. 7					写真図版に掲載

V 二見の地形と生業～調査のまとめと検討～

1 唐剣山遺跡の変遷

唐剣山遺跡は、宇治山田港改良工事(工事用道路)に伴う事前調査で新たに発見された遺跡である。この遺跡は御塙殿神社の西方約300mにあり、海岸から1条目の砂堆裏(後背湿地部)に相当する。遺構面の地盤高は約1.1mと低く、調査当初はここに遺構は無いと予想した。しかし実際には平安時代後期末の遺構のほか、それを覆う洪水砂層が確認でき、大きな成果があった。

ここでは、発掘調査によって明らかとなった当遺跡の変遷について、大まかに触れていく。

a 平安時代後期以前

遺構としては確認していないが、褐色シルト層の中に奈良時代頃と考えられる土師器甕が含まれていた。これが今回の調査で確認した最も古い時期の遺物である。ただし、この土器は摩滅が激しく、当地近隣の遺跡にあったものがここへ自然作用で運ばれたものであろう。

平安時代後期末以前の当遺跡では、遺構が形成されるような人の活動は無かったと考えられる。

b 平安時代後期末頃

当遺跡に遺構が刻まれる唯一の時期である。掘立柱建物、それに伴う土坑、そして井戸が確認できた。掘立柱建物S B 3は小さな小規模建物で、住居として用いられていたとは考えにくい。建物跡周囲の地盤に被熱による赤変が見られること、少量ながら鉄滓も出土していることなどから、この建物は工房跡と考えられる。建物跡南西部にある井戸が通常より小規模なもの、それに関係するのかも知れない。

建物を構成するpit 5からは、製塩用土釜が出土した。この遺物は、当地で製塩業が営まれていたことを示している。今回の調査区近隣に製塩用土釜を用いる施設があること、さらには、製塩が営まれた近傍に鍛冶工房があることを示すものとしても興味深い。

製塩用土釜は三重県、とくに志摩半島から熊野灘沿岸部に分布する特徴的な土器で、散布地點は製塩

関連遺跡である可能性が高いことが伊藤保氏による地道な調査^①によって判明してきた。現在把握できる分布状況は山本達也氏がまとめており^②、最近の成果^③を合わせると合計40遺跡での出土が知られる。山本氏の集成によれば、製塩用土釜の出土地は志摩半島から熊野灘沿岸部にかけての地域であり、伊勢湾沿岸部での出土は無い。唐剣山遺跡は、伊勢湾岸の平野部ではじめて確認された事例となる。

製塩用土釜を用いた具体的な作業方法は未だによく分かっていない。しかし、後述のように伊勢平野部での製塩は熊野灘沿岸部と比べれば比較的史料が残っており、一定の生産状況復元もなされている。今回の出土事例は、志摩半島から熊野灘沿岸部で見られる製塩方法が、伊勢平野部のそれと大きく隔たらないことを物語っていると考えられる。

c 江戸時代後期

平安時代後期以降、当調査区では遺構は確認できない。遺構ではないが、第Ⅲ章で触れた基本層序第Ⅲ層は江戸時代後期にあたる。土質から、この時期は水田であったと考えられる。

基本層序第Ⅲ層の上に堆積する同第Ⅱ層は洪水層で、最大厚40cmの堆積が確認できる。江戸時代後期以降でこれほどの洪水層が形成された要因として、嘉永7(安政元、1854)年に発生した嘉永(安政)東海沖地震津波が考えられる。このことについては、後述する。

2 中世二見の景観と生業

今回報告した唐剣山遺跡の発掘調査地は、現状で最も海岸寄りの砂堆近隣にあたる。調査区も限定されているため、この調査成果から遺跡の空間的な広がりを考えることは難しい。

しかし、調査で遺構が確認できた地点は、一時的とはいえ潟湖(ラグーン)だったと考えられる土地条件の場所である。このような条件下での遺構確認は、当地における当時の環境を考えるうえで、極めて重要な要素を提供すると考えられる。



第7図 二見の条里型地割

そこで、今回の唐劍山遺跡の成果を踏まえ、かつて実施された莊遺跡の発掘調査成果、古代から中世にかけての文献史料、さらには当地の地形環境などを援用することで、中世初頭頃の地形環境を復元してみる。それを基に、二見で展開していた当時の生業についても検討してみたいと思う。

a 砂堆と後背湿地

第II章で見たように、二見には大きく分けて4条の砂堆列が展開している。南側にある成立期が古いものから順に、砂堆Ⅰ～Ⅳとする。砂堆の西は潟湖(かつての宮川河口部)と接しており、砂堆間にも水城が広がっていたと考えられる。

このうち、砂堆Ⅰ・Ⅱには三津遺跡・莊遺跡などが位置しており、近世の二見街道もこの砂堆上を走るので、当地では最も居住環境の良い地と考えられる。砂堆Ⅲ・Ⅳにも人の居住が考えられるが、どこ時期まで遡るのは分からぬ。砂堆ⅢとⅣの間に唐劍山遺跡があるので、この遺跡が示す12世紀段階までに、少なくとも砂堆Ⅲは居住城として利用されていた可能性は高いであろう。

b 条里型地割

砂堆Ⅲの南側には、条里型地割の展開が想定される。当地の条里型地割については倉田康夫氏が言及している⁽⁴⁾が、全体に概説的で、条里型地割の指摘も砂堆Ⅱ・Ⅲ間に見られるものに止まっている。その後は稻本紀昭氏によって文献史料に基づいた指摘がなされている⁽⁵⁾。ここでは、倉田氏、稻本氏

の指摘を踏まえ、二見の地形を踏まえた検討を行っておく。

第7図は昭和52年度に発掘調査された莊遺跡の位置を示したもので、これには報告書刊行年である昭和55年以前の地形図が示されている。砂堆Ⅱ・Ⅲに条里型地割が見られ、明治17年前後に作成された村全国⁽⁶⁾に見える小字を入れた。条里型地割に関わる小字として、「十八」「十九」「廿ヶ坪」「南ノ坪」「四之坪」「五之坪」「八之坪」「九之坪」などが見える。この位置関係から、二見の条里は南西隅を一坪として北上する千鳥形坪並が用いられていたと考えられる。そして、やはり位置関係から「十八」「十九」の北側に条界が、「四之坪」「五之坪」の西に里界が考えられる。それを第7図に示している。復原された条里型地割の南北は、N 6°Wの方位を示している。

また、砂堆Ⅰ・Ⅱを挟んだ南側の低地部にも、この条里型地割と方向の描う地割が見出される(第7図下部)。この地点に条里型地割を示す小字は無いが、砂堆Ⅱ・Ⅲ間の条里型地割と一連で同一方位の地割が見られる。

以上の検討から、二見の砂堆間は、ある段階から条里型地割が展開できる程度に陸地化していたことが考えられる。その初現期は平安時代後期頃であろうが、その時にどの程度の陸地化が進んでいたのかが問題となる。

ここで注目したいのが、西側の30・31坪の位置にある「御塩田」の小字である。稻本紀昭氏が指摘するように、この地名は製塩業に関わると考えられる。そこで、当地における製塩の状況を見よう。

c 製塩業

中世前期の伊勢における製塩業を記した史料として、顯昭という僧が建久4(1193)年に著した「六百番陣状」の「寄海人懸」はよく知られている⁽⁷⁾。この史料には、干潮時には干上がり、満潮時には海面下となる「塩干のかた(潟)」が所有権のある「田(塩田)」という施設して把握され、そこから砂(すなご)を「すすぎあつめ」、「塩竈」に「たれて(垂



第8図 「伊勢新名所絵歌合」のうち「打越浜」(神宮徵古館所蔵模本をトレース)

らして)」焼くことで生産することが記されている。これを分析した渡辺則文氏は当時の伊勢では「自然浜」を利用した方式で、同種の方法ながら揚浜式製塩とは異なるものとしている^⑨。

伊勢にはもう一つ重要な史料がある。「伊勢新名所絵歌合」に「打越浜」である。「伊勢新名所絵歌合」は鎌倉時代末期頃に成立した絵巻物で、資料的価値の高さから重要文化財に指定されている^⑩。残念ながら当時の「打越浜」部分は原本が残っていないが、江戸時代前期に作成された模本を神宮徵古館が所蔵している。第8図はその図をトレースしたものである。

「打越浜」は、現在の御塩殿神社付近の浜を指すという^⑪ので、この資料は二見の製塩業そのものが描写されていると考えられる。しかし、模本という性格もあってか、この画像に関する分析はこれまでほとんどなされていない。ここでは、二見の地で行われた製塩業の内容をこの絵から読み解いてみよう。

まずは絵の全体像である(第9図)。画面は中央上の水鳥が飛ぶ空間によって上下に分けられ、下部は右下の崖面によってさらに2分されており、合計3つの画面となっている。画面Aには海辺・水田・山



第9図 「打越浜」の画郭構成

塊が、画面Bには製塩業の風景が、画面Cには薪割りの風景が描かれる。このなかで、とくに画面Bに注目する。

画面Bは、その中央に描かれた砂浜と思しき場所を中心としている。砂浜には鳥帽子を被った3人の人物が描かれる。天秤棒で容器を担ぐ人(人物a)、馬鉢(まぐわ・こまざらえ)を曳く人(人物b)、エブリで砂を集めの人(人物c)の3人である。人物aは、彼の後方に描かれた水際の表現から、海水を汲んで運ぶ様子を描いたものと考えられる。人物bの持つ工具は馬鉢なので、砂を平らにする作業と考えられる。人物cは、工具の手前に砂が搔き集められているので、塩を含んだ砂(鹹砂)を集めている情景を描写していると見られる。以上の情景は、海水域

に近い場所で行う製塩に伴う生業の一部を描写したものと考えて間違いないであろう。砂堆間に内水面が入り込む、当地ならではの地形を巧みに描写しているのである。

描かれたのが製塩の様子であるならば、砂浜の周間に描かれた施設もその関係と推察できる。現在、揚浜式製塩が国内で唯一行われている「奥能登塩田村」の施設⁽¹¹⁾を参考に、絵巻物に描かれた施設を見てみよう。砂浜の周囲には、2棟を一組とした建物群が2箇所に描かれている。そしてそれぞれに、容器の置かれた土室状施設(①・②)と、斜格子状表現がある土煙頭状のもの(③・④)とが、建物群に伴うように描かれている。土室状施設の内部には木組が伴っているように描かれている。おそらくこれは鹹水槽で、奥能登塩田村の「垂舟」に相当する施設であろう。前に置かれた容器は鹹水を汲み取るもの、③・④は馬鍬で整形された鹹砂が盛り上げられている様子を表現したものと思われる。

また、2組の建物群は、それぞれ釜屋に相当するのである。建物がある以上、少なくともその位置には、満潮時であっても海水の浸入は無いと考えられる。実際に釜屋の位置は周囲より一段高い表現がされている。

では、「打越浜」に描かれた製塩業は、どのような手法に拘るものなのかな。人物a～cの作業地は干渴に相当するのかどうか。人物bの後方に水際の表現がなされていることから、ここが干渴である可能性は考えられるが、これが絵画であることを考えれば、そこまでの断定はできない。それでも、当地で製塩の営まれていた地が海浜部に極めて近い位置にあったことは認めてよいだろう。

以上のことを踏まえ、先に条里型地割のところで見た「御塩田」を考えよう。塩田について「六百番陳状」には次のように記載されている。

<史料1>

其汐のみちひるかたをば田となづけて、善き悪しきをわかつて、上田、下田などいふなり。皆各主の定まりて侍るなり。砂を又まき々々する故に、塩皆垂れとられたるすなごを、塩屋の辺に積み置きては霞もなし。汐のみちひるかたは、掘られたるやうにて砂とるべもなくなれば、しほしむべ

きすなごもなくて悪しかりぬべければ、薛くなり。さ様にまくだにもしへに被引、浪に打て、砂皆崩れうせて、しほ引くかたすべなくなるとぞ申す。それぞ下田と名づけてわろき田にするなり。善きはうるはしくてうせ損ぜぬなり⁽¹²⁾

この史料では、塩田には「上田」「下田」の区別があり、上田は潮の干満で崩れにくい、とある。地形的な環境を考慮すれば、波に打たれにくい砂堆間内水面の最深部がこの上田に相応しいと考えられる。また、「田」という用語と、各々の所有権を主張できること=境界が明確であること、などから、この塩田は通常の水田と同じく、畦で区画されていることが想定できる。実際、畦で区画されている方が干潮時に「水たまり」状となるので、採塩のためには適していると考えられる。

さて、二見の御塩田は平安時代後期頃に「二見郷字御塩田」の「治田」として売買が確認できる⁽¹³⁾。「治田」は水稻耕作にかかる水田とみるのが通常だが、当地の状況を考えると、「塩田」である可能性も残しておきたい。いずれにしても、字御塩田の付近が平安時代後期頃における内水面のボーダーラインであることを確認しておきたい。

d 宗教施設

二見地内に見られる中世前期の宗教施設として、主立ったものを見ておく。

御塩殿神社 莊地区の北部、砂堆IVの上に鎮座する。この位置は古くから変わらないと考えられるが、確証は無い。

利多寺(薬師堂) 「御塩殿文書」⁽¹⁴⁾のほか、「光明寺文書」にもその名が登場する。中世前半期には存在していた。西地区の集落東部に「利田」の小字があり、ここを利多寺の故地と考えておく。

中福寺 中福寺の名は寛弘7(1010)年から登場し⁽¹⁵⁾、正中元(1324)年までは確認できる⁽¹⁶⁾。莊地区的字「常福寺」がその故地であるとする『二見町史』の見解に従っておく。

三津堂(宝蓮寺・薬師寺) 「御塩殿文書」中に三津堂寶蓮寺・三津堂薬師寺として登場する⁽¹⁷⁾。現在三津地区の明星寺にある平安時代後期の木造薬師如来坐像(国重文)は密嚴寺の本尊とされるが、史料では薬師寺の後身が密嚴寺とされている⁽¹⁸⁾ので、



第10図 二見の景観復元（12～13世紀）

※「地名」は小字

元々は三津堂の遺品と考えられる。また、史料から三津堂の寺域には多宝塔の存在が確認できるので、密教系寺院と考えられる。『二見町史』では宝蓮寺を三津地区の寺里中に比定する。ここでは宝蓮寺・薬師寺を含む寺院規模を鑑み、現在の明星寺を含む三津から山田原にかけての一帯を三津堂の故地に比定しておく。

大江寺 江地区、音無山の中腹にある。本尊は木造十一面千手觀音菩薩坐像で平安後期の作である（国重文）。康永元（1343）年成立の坂十佛「伊勢太神官參詣記」⁽¹⁹⁾にも登場する。

安養寺 溝口地区の南西部、五峯山から南西方向に聞く谷部に位置する。平成4（1992）年に開発工事に伴う発掘調査が実施され、12～13世紀頃の寺庵が確認された。近隣には経塚も確認されている⁽²⁰⁾。

天覚寺 東大寺大仏殿の再建で名高い後乘坊重源が、その成願祈持と用材調達を目して神宮参拝に赴き、その後も乗源麾下の衆徒が何度か参拝している。このうち文治4（1188）年4月に参拝した一行の一部が滞在したのが天覚寺である⁽²¹⁾。前出『二見町史』は安養寺近隣の谷状地に比定を試みている。根据は乏しいが、ひとまずそれに従う。

密嚴寺 先述のように、三津堂薬師寺の後身である。「御塩殿文書」中に、「密嚴寺本尊界不動領」という裏書きのある文書が多数認められる⁽²²⁾。山田原地区にあり、明治初年に廃寺になったという⁽²³⁾。

その他寺社 神宮撰社の堅田神社・江神社は現在の位置として置いたが、確証は無い。他には、智光寺・西楽寺などの寺院や、日吉宮・三狐宮などの社祠が「御塩殿文書」に登場する⁽²⁴⁾が、実態は不明で、現地比定もできない。

e 三津湊

前述の「伊勢新名所絵歌合」には、「三津湊」の情景が描かれている。三津には中世段階で「大湊」の字が見られる⁽²⁵⁾ので、重要な湊津が当地に存在していたことは確かである。

地形を見ると、三津地区の南部に五十鈴川古川に面し、丘陵の途切れる地点がある。五十鈴川河口部の内水面から枝川を少し下ったこの地点は、水量が確保されているだけでなく、穏やかな水域として船舶の停泊には絶好の地点と考えられる。ここを三津

湊の位置に比定したい。

この他では、西村の西端部に「湊畠」の小字がある（第10図参照）。ここでは砂堆Ⅲが一部枝分かれし、小規模な湾を形成している。ここにも喫水の浅い船ならば停泊可能である。二見西村付近を対象とした小規模な湊があったと考えられる。

f 二見の景観

以上で見た中世前期を中心とした二見の要素を、地形図に落としたのが第10図である。砂堆間には内水面が入り込み、自然浜式ないしは揚浜式の製塩が営まれていたと考えられる。砂堆間は、現在では埋立によってかさ上げされてるが、元々はもっと低い標高であったと考えられる。つまり内水面は、砂堆間であれば今の標高で1m程の地点までは入り込んでいた可能性が高い。第10図では、誤解を恐れずに内水面域を大きく捉えている。

砂堆Ⅱ・Ⅲ間の条里型地割は、平安時代後期に設定が始まったと考えられるが、その段階では字「御塩田」あたりに水田区画としての条里型地割は及んでいなかった可能性を考えておきたい。条里型地割は、その後に後背湿地が埋没・埋め立てされる中で延長し、室町時代頃には今の状態になっていたのではないかと推察しておく。ただ、証拠となるべきデータが少ないので、現段階では可能性の提示に止めた。

3 江戸時代後期以降の洪水層と遺跡の層序

a 洪水層と層序

今回の発掘調査では、江戸時代後期末頃と考えられる洪水層（基本層序第II層）を確認した。これは最大40cm厚の均質層である。下部にある褐色シルト（基本層序第II層）に含まれる遺物は江戸時代後期のものなので、この洪水層は江戸時代後期以降の形成層である。最大40cm厚の均質な砂層が形成された要因は、嘉永7（安政元、1854）年旧暦11月4日に発生した嘉永（安政）東海沖地震に伴う津波と見るのが最も妥当だと考えられる。

さて、第II層を江戸末期の津波堆積層と考えた場合、当地で発生した他の大規模地震津波の存在が想起される。具体的には、明応7（1498）年旧暦8月25日に発生した明応地震津波、宝永4（1707）年旧

暦 10 月 4 日に発生した
宝永地震津波である。

今回の発掘調査では、
平安時代後期末の遺構面
直上に江戸時代後期の水
田が形成されたと判断し
た。つまり、明応・宝永
地震津波に相当する時期
の土層は、ここでは確認
できなかったことにな
る。嘉永(安政)地震津波
による堆積層を認めるな
らば、なぜそれ以前の地
震津波堆積層が見られな
いのかは意識しておく必
要がある。

ひとつの考え方として、江戸後期に大規模な耕地
整理が実施されたため、それ以前の堆積土が消失し
た、という見方ができる。しかし、平安後期末遺構
の検出面はよく締まっており、江戸後期に削平を伴
う改変が加えられた形跡は見いだしがたい。

想定だが、津波の中でも「押し波」と「引き波」
による違いや、地震に伴う隆起・沈降の違いなどが
堆積土の状態に影響を与えていていることを考慮するべ
きかと考える。また、調査地点による異なりも考
えておくべきであろう。今回の調査地点での状況を
もって、二見地内に明応・宝永地震津波の堆積層は
無い、とすることはできないのである。

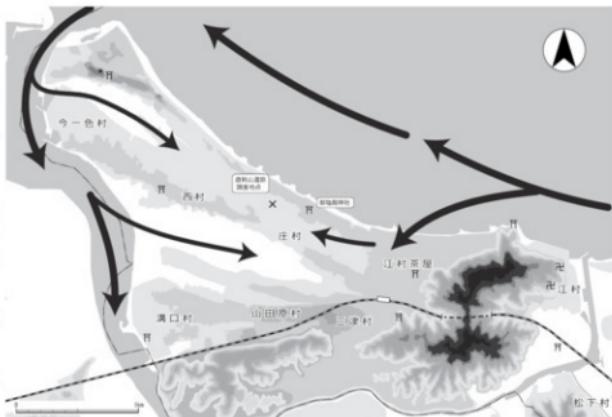
情報が限定されるので、総合的な検証は後考を待
つはかないが、現時点では様々な可能性を考えてお
きたいと思う。

b 嘉永(安政)地震津波と近世の庄村

嘉永(安政)地震は、嘉永 7 年(安政元年、1854)年旧

第 2 表 二見地区嘉永 7 年地震津波状況

村名	半壊以上建物	集落浸水	田畠浸水	その他
松下村	無		少々	
江村	4軒(流失)	床上6尺		浜堤決壊
江村茶屋		4尺	4尺	
庄村	3軒	1尺	3尺	
西村	11軒	7・8分没入		
今一色村	21軒			堤防決壊
三津村	無			
山田原村	無			
溝口村	無			



第 11 図 二見地区嘉永 7 年地震津波浸水状況想定

暦 11 月 4 日に発生した。この時の洪水を記録した
史料に「大湊鳥羽家所蔵文書」がある。この文書は
山田奉行所へ山田三方会合所が報告したもので、伊
勢勢郷土会によって公表されたものである⁽²⁵⁾。以下、
関係する箇所を抽出して掲載する。

<史料 2>

庄村

右半壊式軒、潰納屋二ヶ所、光宝庵半潰、利他寺
破損、高汐ニ而沙入壱尺斗、田畠沙入三尺斗、氏
社押所流倒申候

(中略)

右之通ニ御座候、以上

嘉永七甲寅年十一月

山田三方

御奉行所

山田三方会合からの報告は、地震発生月である
11 月中に即刻調査し、同月中に山田奉行所へと報
告した体裁となっている。公文書という性格上、多
少のタイムラグを想定するにしても、ほぼリアルタ
イムでの調査・報告と考えてよいだろう。

庄村に関するこの史料から、庄村では 2 軒の家屋
と光宝庵が半壊し、利多寺も破損した。被害はそれ
ほど大きくないが、注目は、高汐 = 津波により田畠
に 3 尺(約 90cm) ほど沙入りしていることである。

同じ史料から二見地区各村の被害状況を抽出したのが第2表である。史料2とこれを合わせてみると、津波被害は江（茶屋を含む）・庄・西・今一色に集中していることがわかる。とくに江村では海浜部の堤防が50間（約90m）決壊し、そこから津波が押し寄せている。

江村と庄村の被害は、江村の堤防決壊が主因と見られるが、今一色村から西村にかけてはこれとは別の要因も考えられる。それは、今一色村の砂堆切れ目から逆流するような動きが想定できることである。以上を図示したのが第11図である。

唐剣山遺跡で確認された洪水層は、均質な砂であった。この層が江村の決壊堤防経由での流入土砂であれば、江村・江村茶屋町の集落を経由するため、もう少し荒れた土砂である可能性が高いように考えられる。データが限定されているため、確定的なことは言えないものの、唐剣山遺跡で確認できたのは、今一色村方面から砂堆間を伝って週上した土砂の可能性を考えておきたい。

4 総括

以上、唐剣山遺跡の発掘調査成果を出発点として、中世二見の景観、嘉永7年地震津波の2点について見てきた。小規模な調査とはいえ、非常に興味深い情報が得られたといえる。

二見地区は歴史的に重要な地であるだけでなく、今では景観・観光の方面からも改めて注目が集まっている。また、海浜部に位置するため、近い将来に発生が予想されている東海・東南海地震への対策をこの地でどう行うのかという点でも注目されている。

今回の調査成果が、歴史的な意味だけでなく、防災の観点からも活かされることを期待したい。

【註】

- (1) 伊藤保「三重の土器製塙」（『郷土志摩』52、志摩郷土会、1978年）、同「三重の製塙文化」（『昭和57年度志摩文化財年報』志摩文化財調査保護委員協議会、1983年）など。
- (2) 山本達也「三重県」（『東海土器製塙研究』考古学フォーラム、2010年）。
- (3) 最近の調査で、志摩市浜町島原漁にある南張貝塚で出土した。三重県埋蔵文化財センター「南張貝塚（3～

5次）発掘調査報告」（2014年）。

(4) 倉田康夫「飯高・度会郡の桑里制」（『伊勢湾岸地域の古代桑里制』東京堂出版、1979年）。

(5) 稲本紀昭「中世の二見御厨」（『莊道跡発掘調査報告』三重県教育委員会、1980年）。なお、稲本氏が指摘した堅田里の北定地については、現在の伊勢市役所二見支所のある江地区に字「堅田」があることから、再考の余地があることを指摘しておく。

(6) 三重県行政文書（三重県指定文化財）所収、「伊勢国度会郡都莊田全國」「伊勢國度會郡西村全國」「伊勢國度會郡三津村全國」「伊勢國度會郡江村全國」「伊勢國度會郡溝口村全國」「伊勢國度會郡山田原村全國」（明治17年刊）。

(7) 「六百番歌合・六百番隊状」（岩波文庫、1936年）。

(8) 渡辺剛「中世の製塙技術」（『日本篆豪大系原始・古代・中世（稿）日本専売小社、1974年）」、同「前近代の製塙技術」（『講座日本技術の社会史第2巻塗業・漁業』日本評論社、1985年）。

(9) 小松茂美編「男衾三郎絵詞・伊勢新名所絵歌合」（日本絵巻大成12、1978年）。

(10) 阪本徳郎編著「二見浦名勝誌」（二見浦保勝會、大正2年刊）、二見町編「二見町史」（1988年）。

(11) 奥龍塙田村H.P. http://enden.jp/making_salt/

(12) 前掲「六百番隊状」。

(13) 「国立公文書館所蔵光明寺文書」（『三重県史』資料編中世2、2005年）342～345号文書。

(14) 「御塙殿文書」1（『三重県史』資料編中世1下、1999年）。

(15) 「御塙殿文書」19（『三重県史』資料編中世1下、1999年）。

(16) 「微古文府」2-22（『三重県史』資料編中世1下、1999年）。

(17) 「御塙殿文書」18（『三重県史』資料編中世1下、1999年）。

(18) 前掲「御塙殿文書」18。

(19) 「増補大神宮叢書 神宮参拝記大成」（神宮司序、1932年）。

(20) 二見町教育委員会「安養寺跡・豆石山中世墓群・豆石山經塙群・五峯山2号墳」（2004年）。

(21) 「東大寺衆徒參詣伊勢大神宮記」（前掲「増補大神宮叢書 神宮参拝記大成」）。

(22) 前掲「御塙殿文書」。

(23) 三重県教育委員会編「三重県の文化財」（1996年）。

(24) 「御塙殿文書」19（『三重県史』資料編中世1下、1999年）。

(25) 「太田家古文書」156（『三重県史』資料編中世1下）。

なお、三津湊については伊藤裕伸「中世伊勢湾の津浦と地域構造」（岩田書院、2007年）、岡野友彦「伊勢中世都市の歴史的位置付け」（『都市をつなぐ』新人物往来社、2008年）を参照のこと。

(26) 伊勢郷土会資料整理係「安政大地震と津波・合会所から山田奉行所への報告書」（『伊勢郷土史草』45、伊勢郷土会、2011年）。なお、この文献では文書名が付けられていない。そのため、ここでは便宜的に「大湊羽根家所蔵文書」と呼んでおく。

写 真 図 版



調査区西壁土層（東から）

写真図版 1

調査前風景・調査状況



調査前風景（南西から）



調査状況（北から）



遺構検出状況（南から）



遺構検出状況（東から）

写真図版 3

調査区
遺構
(2)



調査区全景（北から）



掘立柱建物 SB3・土坑 SK2（南東から）

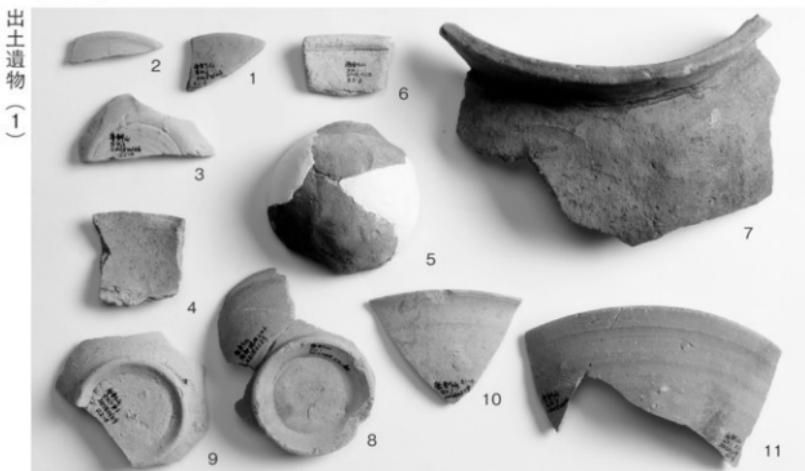


掘立柱建物 SB3・土坑 SK2 と東壁土層（西から）

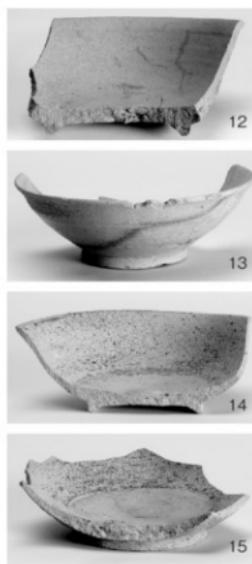


井戸 SE1（東から）

写真図版 5



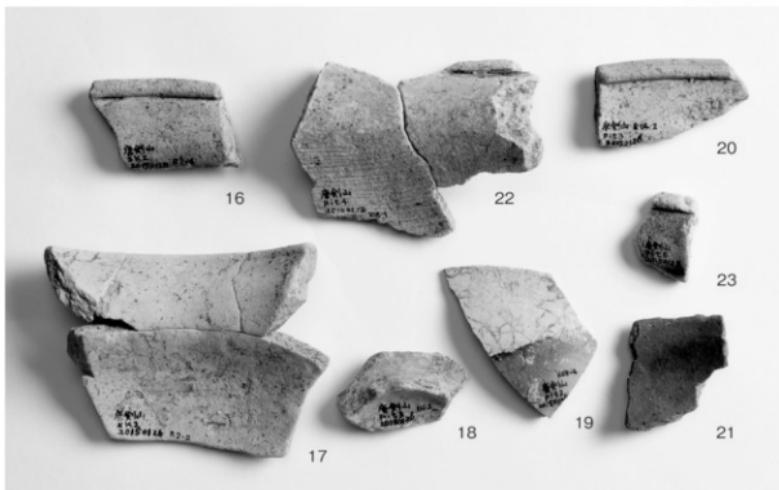
SE1 出土土器



製塩用土釜・鉄滓

写真図版 6

出土遺物 (2)



SK2・SB3 出土土器



褐色シルト層 出土土器

報告書抄録

ふりがな	とうけんやまいせきはつくつちょうさほうこく						
書名	唐剣山遺跡発掘調査報告						
副書名							
卷次							
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	364						
編著者名	伊藤裕偉						
編集機関	三重県埋蔵文化財センター						
所在地	〒 515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 Tel 0596(52)7028						
発行年月日	2016年3月14日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 經	調査期間	調査面積	調査原因
とうけんやまいせき 唐剣山遺跡	いせしふたみちょうしう 伊勢市二見町莊 あざさい - とうけんやま 字才出・唐剣山	24203 b84	34° 30' 40.6"	136° 46' 01"	20150126～ 20150129	130	平成26年度宇 治山田港（海 岸）海岸浸食 対策（工事用 道路）
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
唐剣山遺跡	散布地	中世 近世	掘立柱建物・井戸	土師器・陶器・ 製塙用土釜・鉄滓	中世遺構面上に江戸 時代後期の洪水層を確 認。嘉永(安政)地震津 波堆積層か。		
要約	唐剣山遺跡は、名勝二見浦に面する浜堤帯（砂堆）上に立地する遺跡である。調査の結果、12世紀代の掘立柱建物と井戸を確認し、周辺から製塙用土釜や鉄滓が出土した。二見は古代以来、製塙業が盛んな地で、今回の確認遺構は製塙に関連した遺構である可能性が高い。また、中世遺構面を覆う上層部では、江戸時代後期頃の洪水性堆積土を確認した。層序と土質から、江戸時代後期に発生した嘉永(安政)地震津波に伴う堆積土である可能性が高いと考えられる。						

三重県埋蔵文化財調査報告 364

唐剣山遺跡発掘調査報告

2016(平成28)年3月

印刷 (有)ミフジ印刷
編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

